

見知らぬ人

登場人物

母

娘

男

母は流しで洗い物をしている。

娘は勉強している。

その傍らに男が正座している。

娘「お母さん、なんか知らない人がいるんだけど」

母「え、なに」

母「わ。だれ、この人」

娘「知らない。なんか、気がついたら、いた」

母「え、なんで、なんなのこの人」

娘「お腹へってるみたい」

母「お腹へってるんですか？」

男「……すみません」

母「あら、どうしましょう。もう夕飯かたづけちゃった」

娘「テレビ消して、宿題してて、ふって、見たら、いたんだけど」

母「そんな。そんなことってあるかしら」

男「よく、心配がない、と言われます」

娘「腹へったなって、言いましたよ、さっき」

男「聞こえましたか」

娘「ええ」

男「そうか。こころの中で言ったつもりだったのに」

母「まだ、ごはんがすこし残ってたと思うから」

男「すみません」

母、台所へ。

娘「え、じゃ、玄関をあけて、廊下を歩いて、このテーブルまで来て、そこに座ったんですか」

男「ええ」

娘「全然気がつかなかった」

男「熱心にテレビを見てましたからね」

娘「ああ、それくらい、勉強にも集中できるといいんだけど」

男「宿題、なにをしてるんですか」

娘「感想文を書くんです」

男「へー」

娘「この本の感想です」

男「ああ、これ」

娘「そう」

男「まだ、なんにも書いてませんね」

娘「だって、本も読んでないから」

男「え。ああ、そうか、じゃ、書けませんよ。読んでからじゃないと。この本を読んだ感想を書かないといけないんだから」

娘「わかってます」

男「風を追いかけて、海へ。……タクトはカズキに出会って自転車で旅をする。ほー。面白そうじゃないですか」

娘、頭をかかえる。

男「とにかく読みましょう」

娘「順番が逆にならないかしら。私が感想を書く、それがこの本の内容になる」

男「ああ。でも、この本は、すでに書かれていますからね。それに、なんにも読まないで感想を書くって、よっぽど大変じゃないですか」

娘「わかった。新しいお話をつくって、それについての感想を書けばいいんだ」

男「え、じゃ、この本はどうなりますか」

娘「だから、まず……なんとなく、風を追いかけて、海に行くようなお話を思い浮かべるでしょ、それで、ほら、二人の男の子が自転車に乗って、冒険する感じにして、それから、それについての感想を書けばいいのよ」

男「素直に、これ読んだほうが早くないですか」

娘「うーん。私は、本を読んで感想を書く人になるより、感想を書かせる本になるほうがいい」

母、ご飯とおにぎりを、持って来る。

母「はい、これ、どうぞ」

男「ありがとうございます」

娘「やだ、お母さん、ごはんばかり」

男、おいしそうに食べる。

母「あいにく、なんにもなくて、ごめんなさいね」

男「いえ、とてもおいしいです」

母「そうですか。……あ、そっちは、おにぎりです」

男「ありがとうございます」

男、おにぎりを食べる。

幸福な時間が漂う。

男「ごちそうさま」

母「え、もう、いいんですか。ごはん、おかわり、ありますよ」

男「いえ、もう、これで。……じゃ、失礼します」

男、立つ。

男「さようなら」

娘「さようなら」

男、去る。

母「あ、そうか、……思い出したわ。いまの人、お父さんの若い頃に似てたんだ」

娘「へー。そう。私、お父さんの若い頃知らない」

母「あなたはまだ生まれてなかったから」

娘「……なに、え、顔が似てるの？」

母「そうね、顔かな。……雰囲気っていうか」

娘「この前、剣道で友達できたんだけど、その子がとても、アヤちゃんそっくりなの。顔とか、仕草とか。……でね、私、なんか、その子としゃべってたらアヤちゃんと一緒にいるような、そんな感じがし

たの。その子にもアヤちゃんと一緒に中身があるっていうか。……でも、びっくりした、そのうちアヤちゃんじゃないってことがわかったから。似てても、全然違うって」

母「そう」

娘「突然わかった」

母「どうして、わかったの？」

娘「……どうしてかな。急に、ぽって、あ、違うって。……そんなの、あたりまえなんだけど」

娘、宿題に戻る。

母、すすり泣く。

娘「え、なに、どうしたの」

母「……あの人、おにぎり食べてた。……おかずの代わりに、おにぎり食べてた」

娘「お母さん。もう……」

母「なんか、なんか、あったはずよ。卵焼をつくるとか、ちょっと走ってお惣菜買って来るとか。それなのに、私、おにぎりを握って出しちゃった」

娘「いいじゃないの、それで」

母、さめざめと泣く。

娘、小さく溜め息。